

## 有能なる漕ぎ手・島抜人

ヨーロッパで妖怪が徘徊し始めた頃、日本は江戸近郊の深川富岡町でひとりの偉大なる $\wedge$ 庶民 $\vee$ が病死した。死因は労咳、弘化二年（一八四五年）六月三日のことであつた。

彼の名は佐原喜三郎。文化三年（一八〇六年）に下総国佐原村新田の百姓の伴として生まれているから、彼の死は三十九才のときであつた。彼は労咳で死んだけれども、彼が囚われの身となつていた東大牢に天保九年（一八三八年）の火災が起きなかつたならば、実は彼はやがて死刑に処せられる運命にあつた。ところが、彼が畳の上で死ねたのは、当時牢名主を勤めていた喜三郎にこの火災による牢屋解き放しの際、大なる功績があつたからである。つまり、彼は鎮火ご牢獄の仲間を全員帰牢させたのだ。そして、その功により、彼は無期禁錮に減刑され、さらにそのご牢内で執筆した獄中記『朝日逆島記』が幕府の高官に知れることになり、その文化的貢献によって死に先立つ約一ヶ月前の五月九日、江戸十里四方追放というかたちで無罪放免となつたのである。

この偉大なる $\wedge$ 庶民 $\vee$ が歴史の片隅に記憶されている

## 佐原喜三郎

菅 輝 生

のは、前述の二貢献による。しかし、それは歴史に記憶されるための一契機でしかない。僕が彼、喜三郎を登場させるのは、彼が脱獄囚という名の犯罪者として実に偉大な器であつたからにほかならない。つまり、彼は $\wedge$ 島も通わぬ八丈島 $\vee$ といわれた自然の監獄から脱走し、しかもそれを成功させた唯一の人間であつたのである。

江戸時代二百六十五年間の八丈島流人は一千七百人といわれている。このうち八丈島の土と化した者は千人強、赦免花（ソテツの花）が咲いて無事帰国できた者が約七百人、残りの若干名（約六十人？）が脱島しているが、途中で溺死するか、結局は逮捕され死罪に処せられたりしている。

もの本によれば、八丈島からの抜舟は十三件あるといわれているが、国地（内地）に上陸できた成功例はただの一件しかないのである。つまり、この唯一の島抜け成功例のリーダーが博徒貸元あがりの喜三郎なのである。

喜三郎ら七人（うち一名は吉原の遊女花鳥、あとは全員男性）の島抜けは天保九年七月三日未明のことであつた。彼らは八丈島の漁船を盗んで脱島したが、喜三郎の脱島

計画はひじょうに用意周到を極めたものであった。とくに、渡海に関する実践的知識の確実性には驚愕に価するところが多い。

というのは、当時の漁船では本土までの渡海はなかなかの難事業であったからだ。というよりも、あんな小さな船を幾日も操作して国地までたどりつくには、運も左右するであろうが、かなりの実践的な知識が必要だったのである。否、それ以前の問題として、喜三郎以前の、喜三郎以降の脱獄者たちには、船にどうやって乗込むか、すなわち船での生活のしかた、の観点が欠落していた。

喜三郎は博徒であったが、いちじは虚無僧（僧名を朝日象現という）をしていた、今日風にいえばいわばインテリやくざだった。そのインテリやくざが偉大なる庶民であることができたのは、彼は船での生活を知っていたからである。彼が抜舟計画のために準備したものは、白米五升の握り飯、干飯一升、鯉節二百本、竹筒に入れた火縄と真水、帆柱二本、かじ二本、かい八艇、海路見取図などであった。つまり、これだけの準備がととのえば、渡海上の知識がなくとも、勇氣と、勝利の女神が微

## 神戸港湾の同志から

笑みかけれが成功できる可能性がひらかれてくるのであった。いつたえによれば、喜三郎は八丈から漂着した常陸国鹿島郡荒野浜附近まで六日間を漕ぎ手四人とともに漕ぎつづけたという。

無事上陸できたのは、喜三郎と花鳥と男一人の計三名だけだったらしいが、漂着した七月九日からちゅうど二週間目に彼と花鳥は再逮捕され、花鳥は江戸引き廻わしの上斬首させられている。

私見では、彼の再逮捕は、八丈島を島抜けしたときにすでに開始せられていた。というのは、流刑地・八丈島は本来なら国家権力のA権化Vとして存在すべき場所であったが、国地から遙かに離れた地理上の八丈島は、現実的には日常生活的に国家権力から自立した島であった。そこから島抜けし、中央集権の地たる江戸にむかおうとしたことは、実は、わざわざ逮捕されるために脱獄したようなものであった。

(一九七二・四・二四)

親愛なる萩原君、先ず久濶を叙す。港湾労務者の反合理化斗争については新聞の報道で御承知でしょうが、笠原氏の逝去を機縁として神戸港で賃金奴隷として生き始めた小生も、老衰しはじめた肉体には勝てず特に満60才を越してからの差別待遇に対しては僅少派の反抗しか出来ない。労組自体は企業内組合ではあるが、港湾共闘を武器としてスト権確立以来50日以上の春斗反合理化斗争を続けつつあり、神戸港内外滞船一七〇隻以上、船員ス

## 新潟アナキズム運動の一側面

僕が故三宮吉平君と戦後新潟県におけるアナキズム運動を開拓したのは、たしか昭和二十一年だったと思う。それまでの勤め（いまの新潟商工会議所）をやめて、かって社会党県顧問であった故長谷川寛氏と「新潟労働新聞」を起こした。

長谷川氏は弁護士であり、青山脳病院（事務長はアナキストの三宮吉平君であった）の院長でもあった。古くからの社会民主主義者で、かつては戦前、安倍磯雄氏を党首とする社会民衆党の県委員長でもあった、僕が彼の知遇を得たときは労働総同盟県連の会長も兼ねていた。

トと呼応して郵船始め船会社コンテナ会社は大打撃を受けている。余命幾何もない小生だから、他のインテリ共や市民小市民達がいかに社会末的頹廢精神ともに精神的公害と共に利己主義的拜金主義的の奴隷として自滅しようとしまいと関心はない。

売春婦同様肉体の切売で生き続けているルンペン・ブロレタリアートだけが、運命共同体としての同志として暗黙の共感性で結合している。六月五日 本多宏盛

山口 健 助

労働新聞は週刊四頁建てだったが、新潟県ではユニークな存在としてかなりひろく読まれ、毎週五百部を発行していた。

これを拠点として、アナキズム、アナルコ・サンジカリズムの思想や動向の紹介を部分的であるがとりあげてきた。さらに、その当時アナキストもしくはその同調者として、三宮吉平、石黒開蔵、小林清一郎、藤崎潔、三島一郎、相馬一郎、平沢貞太郎、田中鉄三郎君らと「社会理想研究会」（代表理事三宮吉平）を起こし、機関誌として「社会理想ニュース」を発行した。また「平民

新聞」の新潟支局も開設し、かなり広い読者を獲得していた。

社研は文字通りアナーキズムの研究団体として、会員数も百名に近いものがあった。そして、毎週アナーキズムの理想や、マルクス主義、社会民主主義を狙に乗せ講演や討論会を行なった。

また、この研究会が母胎となり実践運動に乗り出した。まず、新潟印刷出版労働組合を青木、三島、田中、平沢、栗川、長谷川、上村君らを中核として組織した。この組織はだいたい新潟市の印刷労働者の大半を包含し、三百名余を越えた。そして賃上げやボーナス斗争に統一的要求を掲げ、印刷同業組合に実施を迫った。

がんらい、新潟は零細企業、中小企業が多く、印刷労働者の地位も低く足並みはそろわなかったが、印労結成以来、労働運動は異常な高まりを示した。

また、三条市では藤崎、長谷川君らが社研の支部をつくり、これを母胎として「三条合作社」を起し、印刷工場を協同経営とした。そして、これを母胎とし「中越日々新聞」という日刊新聞を発行した。この新潟県における運動が注目されたか、故石川三四郎氏、宋清河君、植村諦聞君らが相次いで来 した。

だが、この運動も二三年にして挫折した。その責任

な農業協同組合の設立を念願とし、県下の農業団体と提携してその準備をすすめ、それを通じて従業員の完全雇用を実現しようとしている折、農民を敵にまわすようなことは、まさに自殺行為にひとしいものがあった。

幸い、組合員の大多数が支持してくれたので、僕は追放をまぬがれた。僕としては当時アナーキストが中心であった日本労働組合会議との提携を強化し、労働運動の本流を進むことを念願した。そのため、相沢尚夫君、入

## 親殺し賛成

君、君たらずとも臣、臣たれ。親、親たらずとも子、子たれ。親のためには子は身を売るのも当り前。これが戦前の道徳観であった。だがこの封建思想は今なお根づよく生きている。……実の娘に稼がせるばかりか、絶えず犯して何人もの子をませたケダモノにも劣る父親がいた。逃げる事もできぬ娘は思い余ってついに父を殺した。その娘に親殺しの極刑を科せという論議が平然となされている。性愛の結果世に出た子供を愛育する事は犬猫でもする。食うに困って子供を道づれに心中するのもトンでもない話だ。子供には子供の人格がある。親の思

の一端は僕にもあるのだが、生活問題から僕はこれを経てゆけない羽目に陥った。そして、古巣の農業会（戦前、戦時中は僕は全国農業会本部に勤め、北陸駐在員として故郷に派遣されてきたのだが）に戻り、新潟県農業会従業員組合書記長として専従した。

当時の県農従業員組合は三千五百人の組織を有する県下でも屈指の労働組合であった。だが、マッカーサーによる農村民主化の指令で、解体の運命にあり、これにかたして、新設される農協連合会に従業員の身分を移すかが大きな問題であった。

県農従組合は「完全雇用の実現、民主的農業協組合の設立」をスローガンとして、日農、農業復興会議と提携して、この事業を強力にすすめた。だが、内部には左翼一特に共産党フラクションの活動が強く（委員長の馬場勝男君は共産党シンパであった）ともすれば産別会議に傾斜するものが強かった。

僕は「労働組合の政治的中立」を堅く守り、左翼勢力の排除につとめた。一時は末期の全国農業会従業員組合（執行部の大多数は完全に共産党に牛耳られていた）から全国的ゼネストの指令がきたが、僕はこれを拒否した。そのため県農従組内の左翼から「書記長独裁」として強い突き上げをうけた。だが、僕は農民の手による民主的

江汎君、江西一三君らを招きしばしば講演会や研究会を開催し、精神的連帯を強化した。

県農協連合会（生産、信用、販売、購買、養蚕）が設立され、従業員の完全雇用が実現したとき、僕の使命は終わった。その後、指導農協連合会の情報課長に迎えられ、労働組合運動から離れたが、新潟県におけるアナーキズム運動か、戦後芽生えながら、これを果たすことができなかつたことに大きな責任を感じている。

## ハギシン

う通りにしようとするにはめる事さえ不合理である。まして、非人道的な言動に及ぶ親は、親として敬愛し従う必要は全くない。稀に見るそうした親を思い余って殺したからといって、重罪にする事は全くない。

なぜこんな事を書いたか。実は、黒色戦線社の複製版『難波大助大逆事件』を読んだからである。私は大助については十数年前に、雑誌『自由』に原敬吾の書いた「難波大助の生と死」しか知らなかった。それでもかなりよく調べたものだと思心していたのだが、今度のパンフを見て、戦前にこうした資料があった事に驚いた。今日な

お大助の郷里山口では、噴飯ものの伝説が流布されている位だ。大助は非道な父親の故に、家族制度と私有財産制度を本能的に憎み、天皇暗殺を図るようになった。彼が無政府主義や共産主義を十分理解していたとは思えないが、放浪と労働の間に権力への反逆心がますます固ま

## 戦後の思い出 一三

杉 藤 二 郎

一九四七年、組合長時代（昭和22年）

私にとってこの年は、総てを芽生えからスタートせよと教え込むように、私を蘇らせた年である。当時、私は内勤と言って、労務係室内で、従業員の保健衛生、福祉関係の事務を受持っていた。同じ労務係でも、外勤は、一番方線込みの関係上五時半に出勤するが、内勤は七時が始業時間である。私は六時半頃出勤するのが常であった。

小正月（おかがみ開き）も済んだ十八日朝、私は平常通り労務係へ出勤したが、間もなく女の子が生れたと、家から連絡があった。別に母子とも異常はないとの事なので、終業時間の五時まで務めて帰宅した。

私は家庭生活らしきものを、戦前は殆ど送ることがな

り、ついに悪の根源を絶とうと決意するに至ったのである。今回発行されたパンフは、弁護士松谷与次郎・今村力三郎の論説、当時警視庁警務局長だった正力松太郎の手記、大助が友人や父親にあてた遺書からなっている。貴重な資料である。（七二年六月刊九〇〇円）

かったので、赤ん坊の顔を、生れたその日に見るのは初めてであった。赤ん坊には住所の一字を取って桂子（ケイコ）と名附けた。福岡県嘉穂郡桂川町大字吉隈十二番地。麻生鉱業株式会社吉隈坑というのが当時正式の呼称であった。社長は麻生太賀吉、夫人は故吉田茂首相の娘和子。この会社名は、後日麻生が山鹿野金山を手に入れたり、田川の産業セメントや鉄道を買収したりするに至り、麻生産業K・Kと名称が変わると共に、炭坑も芳雄鉱業所吉隈坑となったり、吉隈鉱業所となったりするが、これは私個人には関係もないことなので、自序に戻る。

さて、私は子供が生れたことを喜んでばかりも居れない状態であった。というのは、昨年以来次々に公布される労働関係の法律や、新憲法の勉強、その外に採鉱冶金

の本を勉強する必要にせまられていた。勤務も繁雑だったが、労務雑夫という名称の下っ端見習が、最も痛感したことは、会社の鉱員募集の悪い点であった。会社では鉱員募集のため少なからぬ費用をかけ、相当の地位の職員を全国各地の職業紹介所へ出張させる。募集係は頭数を揃えるために、「労働はやさしく金になり、家があり食糧も豊富、交通費も支給」など、よいことづくめをならべて、連れてくる。ところが、実際に、山に来てみると、地底の労働は地上では想像できないもので、坑口から切羽まで、傾斜二十五、六度の坂道をキャップランプの乏しい光をたよりに、下りは三十分、上りは五十分も往復。それも正常の歩行ではなく、下る時には滑らぬように両脚をガニマタにして、相当の速度で集団について行かねばならぬ。上りはまた、爪先を突立てるようにして、フウフウ息を吐いて上る。これだけでも慣れない者には、この上ない苦痛であるのに、地底の悪い空気、三十三度もの高温の中の重労働。家があるといってもその当時の炭坑地帯では文化、娯楽といった甘いムードはない。これらの実情は、募集の時には全く聞かされないのだから、辛棒できなくなつた者はダマサレタと怒り労務係に文句のありつたけをぶちまけて辞めていき、定着する者はほんの僅かであった。

私は募集に出張が出来る地位ではなかったが、自分の郷里で炭坑の実情をよく話し、納得ずくで連れてくれば一人でも二人でも落付くのではないかと、係長に意見をのべ、名古屋の職業紹介所に出張させてもらうように頼みこんだ。係長は、職員でない者の出張手続は面倒なので、しぶってはいしたが、ともかく二月の中旬に私は名古屋へ出張することになった。滞在予定期間二週間である。出張に際し、労務の先輩から募集の要領を教えられる。それによると『名古屋市内にある、南、中、北、の職業紹介所（国営）へ行き求職者をつかまえたら炭坑のよい事を並べて連れて来い』と言うのだ。とに角、私は二週間分の食糧をリュックに入れ旅立った。当時、米など異動さす事は禁じられていたが、炭坑の職員が鉱員募集に出張する時は特令で許され、占領軍の穀物異動許可証を持ち、遠距離切符（四〇キロ以上の国鉄切符は発売制限があった。）も証明書で買えた。然し汽車は超満員で、出入口まで塞ぎ、窓から降り降りする状態であった。辛うじて窓から車内に入ると、網棚に腰をおろし、座席の背もたれ（座席間を区切る板）の上に足をのせている朝鮮人が、『荷物をここへ』と、命令するように指示し、私のリュックを取り上げて、網棚の上をうまく整理し、のせて呉れた。軍隊の不寝番ではないが、立ったなり居

寝りし、名古屋へ着いた時は、かなり疲れを覚えた。麻生の出張所が名古屋市港近くに出来たのは、ずっと後の事で、その当時、出張する一般職員は、市外か戦災を免がれた安宿を利用したものだ。私は母の家を宿舎代りにして、宿泊代をチョロマかし、五、六日職業紹介所を廻り、係の人に頼み歩く。所内には大手炭坑の募集広告が一面に張りつけてある。ポスターを持たずに来た自分は、三井、三菱、古河など大手筋炭坑の宣伝広告に、大資本の威力を知らされた。裏話も耳に入る。炭鉱が紹介所へ顔を出す時は、手土産が要るということだ。贈収賄は公然と行われ、料亭で酒宴を開いたり、女を抱かせたり、目に余るものがあった。職業紹介所が私に冷たかったのは当然だ。幸い名古屋は私の郷里でもあるので私は自分で募集宣伝を試みた。諸々の知己を通じ方々へピラを貼る。「麻生、坑員募集。働き度い者は裏塩町の毛糸屋、杉藤まで、先ず話を聞きに来て下さい。内容を聞いた上で就職を決めて下さい。働く働かないは自分の自由です。」

前記の貼紙を見て、私の処へ来たものは可なりの数あったが、私は炭坑の真相を話し諒解する者だけ連れて帰るつもりでいた。ところが、一週間たった或る日、私は感冒で臥っていたら、二通の電報が来た。一本は会社名、

と、今までの組合は御用組合で会社の言いなりであること、一種のクーデターの如き方法で、組合は解散し、職場委員や組合代議員、副組合長まで既に選挙で決ったこと。組合長選挙の投票日は四日後に迫り、前組合長の柿川、藤尾の両名が、また立候補して運動を展開していることなど。折角新しい組合が発足しても、柿川、藤尾のどちらも、初代、二代経験済みの大納屋出身ボスで、組合長として不適任である。大半の新代議員は私の出馬を期待していると言ひ話だ。会社からは、私が寝ている時に、明日職員辞令を渡したいと言って来たそうであったが、いろいろの話を耳にした私は、労働組合長に立候補する腹を決め、集っている連中にその旨を告げた。それから労務係長宅に出かけ、三日間の休暇と立候補の意志をのべ、選挙事務長を和田尊氏に決めると、その場から選挙運動を始めた。ポスターと言っても、古新聞に組合長候補者杉と二と書いただけのもの、そのポスターを書く者、貼りに走るもの。私はその晩、三坑の繰込場へ出掛け、三番方の入坑者（夜十一時）に顔見せ演説。翌日からの三日間は、朝四時から夜十二時まで飛び廻り自分の経歴から労働組合長としての抱負をしゃべって歩く。何しろ運動期間は三日しかないのに、坑口は二坑、三坑、弥栄坑と三つ、それが二、三番方と九回、坑外夫

もう一本は労組発信である。どちらも文面は「スグカエレ」とだけで、何が何んだかさっぱり解らないが、臆測をやめてひと先ず帰山することにし、色々と求人について母に頼み、入山を決めていた者に連絡して、翌日の夜行で、三人の就職希望者を同行、炭坑に向った。筑豊支線碓井駅に出迎えてくれた人は、会社関係と労組関係の二組、どちらも、先を争って私に話を持ち込もうとする気配だ。この空気を読み取った私は、先ず順序として、労務係長に挨拶し、同行した入山希望者を労務係員に、食堂へ案内するよう頼んだ。その間に、労務係長は私に早口で、「君を労働組合候補者に押すようだが、辞退してほしい。」と言った。労組の者達は、私を取巻いてその中の大野邦彦と名乗る男が「兎に角、お宅まで参りましょ。」と皆をうながして歩き出す。私はゆっくり一晩考えたいと答えただけで家に帰った。家では玉置の親父をはじめ隣りの和田尊たちが待っていた。そこへ大野邦彦が加わって、私を口説き落そうとかくる。私は風邪気味で疲れているから、二、三時間休ませてくれと、ことわって、ふとんの中にもぐり込んだが、ふと目覚めたら夜も十時近くであった。玉置、和田、大野達は、隣室で酒を飲みながら雑談していた。私も仲間入りして盃をかたむけ乍ら、今度の組合異変を聞いた。それによる

は、炭務、工作、資材、労務等だが、職場が広く、杭木置場から庄風機、エンドレスと異動して歩くサトリ（運搬夫）、また機械の音に声を消され勝ちを撰炭場など、雑多な職種の人達に、一人でも多くと、私の声と顔とを売ろうとする努力は容易なことではなかった。飛び廻る三日間は、またたく間にすぎ投票日を迎えた。投票は、朝六時から午後七時まで即日開票。私の処へ選挙管理委員会から当選を知らせて来たのは、同日夜十一時十分であった。生れて以来私は、これ程感激したことはない。炭坑は縁者関係者が多く、私のような輸入者は選挙などの場合は損だ。それに打ち克たねばならぬ苦勞を、立候補して身にしみて感じ取ることが出来た。

たとえ組合長が権力の座であったとしても、労働者解放運動を進めるために、この座は私にとって必要なものであった。選管が告示した開票結果は左の通りである。

杉藤 一、五五一票

藤尾 三七四票

柿川 一八二票

無効票 一六票

合計 二、一二三票

その夜、私の家へ組合幹部が集まり、祝盃を重ね旁々

は、組合事務室が手狭まで構内電話一本なく、代議員会を開く場所もない有様で、活動的でないことを知った。三役を中心に先づ組合の体制から整えることを強調し、早速代議員会を招集した。討議を重ねた結果、現在有る托児所（後保育所と改称）を移転させ、その後を組合事務所に改装することに意見の一致をみて組合長と副組合長が会社側との交渉をまかされた。私は「組合三役に一任する」と決定を訂正させ、その衝に当った。この件は山（坑口）の労務や総務係ではどうにもならない事を知り、飯塚市立岩にある麻生本社と話合うことになった。最初の中、会社側の態度は強硬で、組合の申出を受け付けようとはしなかった。然し私達は諦めず執拗に喰い下った。当時、占領軍政策の一環に、労働組合の助長があり出炭一トンに対し一円の割で組合基金を積立てる義務が資本家に負わされていた。この事を私達が持ち出したので、話は急速にまとまり、保育所の新設と同時に労組も移った。この事務所は構内のほゞ中央で、診療所、三坑労務、採鉱係も近くに有り、ちょつとした高台で、グラウンドを挟んで協和会館（後日労働会館と改称）が見える場所である。構内電話も取付け、管理人として前（マエという姓）青年部長一家を住まわせた。道路のなゝめ向側に診療所と二十床の病室があり、その向うが大きな谷

その他）、塩、地下足袋などの摘発、続いてそれらの物資を直ちに特配（時価相場は当然個々が支払う。）として、全従業員に渡した。何しろ食糧をはじめ地下足袋など、日用品に至るまで、一般社会では到底手に入らない時代であったが、炭坑には進駐軍命令で、優先的に必需物資が十分に供給されていた。それを炭坑では稼働方数を基本とした配給方法なので放出を引締めたので、地下足袋など真に必要とする職場に働く者でも、不自由なく買えると言ひ訳ではなかった。そこへ摘発物資を特配したので、労働者の喜びは大きく、ひいては私の人気も上昇した。

四月には労働基準法、地方自治法、独占禁止法の公布となり、次々に勉強しないと自分が指導者面をしておられず、夜も昼も暇さえあれば、新聞の切り抜きや、種々の出版物も手に入れて精読し、時代に後れまいと努めた。今日なお手許に残る「英和対照の日本国憲法」アポロ社発行を見る時、紙は粗末なザラ紙、表紙に至っては何処かの厚紙ポスターの裏を使つており、当時如何に紙類が貴重であったか想像できるであろう。

四月二十日第一回参議院議員選挙で、社会党四七、自由党三九、無所属一〇八の議席を決め、続いて二十五日の衆議院第二十三回議員選挙は、社会党一四三、自民党

間で、それに水が溜り、ボートを浮べる程大きな池となっていた。この池は、炭住敷地造成のためボタを捨て出し、日ならず埋められてしまった。

組合長就任後第一の任事らしきことはと言えば、配給所（分配所と呼んだ。）の隠匿物資摘発である。職場委員からの通告により、このことを知った私は、相手に感付かれないように策を練り、気心のわかった代議員数人を使つて要所々々を固め、配給所々々に面接を求めた。私達労組幹部が、隠匿物資の摘発に来たことを知らない配給所長は、配給台帳を前にして、私の質問に答えていた。私が参考までに倉庫内を見せて呉れと言うと、ちょつとためらったが、すぐ覚悟を決めたか、鍵を持って立上り倉庫へ案内した。倉庫内には、市場にはない物資がずい分色々と積まれていたが、私達は米だけに先づ重点をおいていたので、帳簿面と合わない多量の米について質問した。所長は預り米とか有附け米とか種々弁解するが、シドロモドロで見る目にも気の毒な有様だった。當時は何処の炭坑でも、大なり小なりの隠匿が行われ、権力者共の悪徳が行われていたようである。吉隈坑では、本社の意向を伺つた上、労組の申出を受け入れることになり、僅かな非常米を残し、鉦、職全員に実質給与として公平分配した。米に次いで甘味料（砂糖、ミツゲン、

一三一、民主党一二六、共産党三五議席と日本の歴史初めて以来の革新政党進出であり、五月に片山哲内閣が樹立された。社会党内閣の誕生三ヶ月後には、首相官邸へ各炭坑の労働組合長を招聘し、閣僚より石炭増産を訴えた。担当商工大臣は水谷長三郎（京都出身）で、私はその席上、大臣に、労働者のおかれている立場を二三説明し、水長さんの英断を求めたが、権力者ともなれば、所詮一つ穴のムジナであった。もともと革新政党内閣に大きな期待をかけていたわけではないが、それ以来私は一層、政治屋がきらいになった。

#### 読書会「神と国家」についてのお知らせ

既報の通り九月の涼秋に読書会を開きます。急がずあせらず参加者の方々の意見を入れつゝ、アナキにやりました。さしあたって9月中は次ぎの通りです。

☆場所・豊島振興会館小会議室

☆日時・9月2・9・16・30日（毎土曜4回）23日は休

み。10月度は追って知らせます。（午後六時十五分より）

☆費用・英文テキスト代200円会場費毎回50円

☆申込先・リベルテール社またはバルカン社へどうぞ。

場所柄15名までしか席がありません。